

最古? スマイル埴輪



奈良県桜井市の茅原大墓古墳（国史跡、全長86^{メートル}）で、古墳時代中期初め（4世紀末）に作られたとみられる武人の埴輪1体が見つかった。市教委が24日発表した。人を表現した人物埴輪の出土例は、これまで5世紀初めく前半が最古とされてきた。市教委は「人を埴輪で表現するようになった契機がわかる重要な発見」と話している。（渡義人）

奈良・茅原大墓古墳

同古墳東側のくびれ部で数百の埴輪片が見つかった。つなぎ合わせたところ、高さ67^{センチ}、幅50^{センチ}の武人と判明した。盾を構え、頭にはかぶとをかぶっている。目と口は穴が開いた形で表現され、目やおの周りに赤い顔料が残っていた。あごには入れ墨を示す線刻模様があった。市教委によると、今回の発

掘で一緒に見つかった円筒埴輪が4世紀末のものと考えられることから、この人物埴輪も同時期に作られたとみられるという。古墳上部から滑り落ちた形跡があり、本来は古墳の上に立っていたらしい。

埴輪は、古墳時代に円筒や水鳥、家などの形で現れたといわれる。しばらく人の形は作られず、大和王権の中核があった畿内に現れたあと、全国へ広まったと考えられている。人物の最古の出土例は、5世紀初めく前半の拝塚古墳（福岡市）や墓山古墳（大阪府羽曳野市）だった。



茅原大墓古墳から出土した日本最古と見られる人物埴輪 24日、奈良県桜井市、森井英二郎撮影

茅原大墓古墳は、帆立貝式古墳といわれ、前方部が短いホタテ貝のような形が特徴だ。葬られた人物は不明だが、古来、神の山とあがめられた三輪山の西のふもとにあることから、石野博信・兵庫県立考古博物館長（考古学）は「三輪山の信仰と強い関わりのある一族が古墳を守護する意味で作ったのだろう」とみる。

現地説明会は26日午前10時〜午後3時。埴輪も見る事ができる。JR三輪駅の北約1^{キロ}。問い合わせは市立埋蔵文化財センター（0744・42・6005）へ。